

2017 年度 教育・研究年報

目 次

II 研究・教育年報

- 一般教養・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- 基礎看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- 成人看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
- 老年看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
- 母性看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
- 小児看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
- 精神看護学・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

2017年度 一般教養領域活動報告

1. 領域構成

清水哲郎（教授）、大井慈郎（特任講師）

2. 一般教養領域における教育に関する内容と評価

2017年度は、清水教授は「探求の基礎」を担当した。本科目は人間の知的営みの基礎となる見方を学習するものであるが、なお検討してよりよい内容にしていく必要がある。

大井特任講師は「情報処理」を担当した。本科目は、大学生として必要な情報リテラシーの理解やアカデミックスキルなどを学習するものである。今後自己学習コンテンツをさらに充実させたい。

3. 一般教養領域における研究に関する内容と評価

2017年度は、清水教授は科学研究費助成事業 基盤研究(A)（課題番号 15H01861 代表者：清水哲郎）の推進を軸に、次のような研究活動を行った。

- ・ 臨床倫理の検討システムおよび本人・家族の意思決定支援の研究開発。
- ・ 研究成果を本学の教育カリキュラムに活かす方途の研究開発。
- ・ 研究成果の臨床現場への還元として、臨床倫理セミナーの開催、医療関係諸団体の臨床倫理研修への協力。日本医師会生命倫理懇談会および厚生労働省人生の最終段階における 医療普及・啓発の在り方に関する検討会における意見具申。
- ・ 研究成果の発表として、著書（共編著）の刊行、専門雑誌における論文発表、学会公募シンポジウムにおける発表等。

大井特任講師は科学研究費助成事業等の競争的資金を得、また地方公共団体との協働事業参加等により、次のような研究活動を行った。

- ・ 科学研究費助成事業 若手研究(B)（課題番号 17K13838 代表者：大井慈郎）による、インドネシアジャカルタにおける現地調査（関連してインドネシア大学客員研究員となり、また同大学社会学研究室と共同研究協定を取り交わした）。研究成果の一部は、ジャカルタ郊外の労働者に関する学会発表や招待講演として公表。発表論文が2017年度日本都市学会論文賞を受賞。
- ・ 科学研究費助成事業 基盤研究(B)（課題番号 16H03319 代表者：内藤耕）による、インドネシアカラワンにおける農村の変容に関する現地調査。
- ・ 介護予防事業研究（東北大学教員等と協働）にて、宮城県富谷市保健福祉部長寿福祉課と連携し、来年度より進める高齢者サロンについての研究のための準備作業。

- ・平成 29 年度復興庁「心の復興」事業「復興を支えた地域住民の想いを活かすプロジェクト」により、宮城県気仙沼市、南三陸町、七ヶ浜町、山元町にて、行政からの情報収集および復興住宅支援員と住民に対する聞き書き。（成果は出版物としてまとめ、地元に戻す）。

開学初年次の研究環境における活動としては、それなりの成果を挙げた。一般教養領域は、各教員の専門領域が様々であり、領域としての研究活動の機会は少ないが、看護学諸領域の研究への協力等、本学の一般教養領域所属教員の能力を活かす方途を探りつつ、次年度以降取り組んでいきたい。

以下論文等

【著書】

- 1) 清水哲郎：意思決定プロセスの臨床倫理、本人・家族の意思決定支援，日本医療社会福祉協会・日本社会福祉士会編，保健医療ソーシャルワーカーアドバンス実践のために－，中央法規出版，2017. 分担執筆(第3章第1節Ⅲ・Ⅳ) p116-133
- 2) 清水哲郎，会田薫子（共編著）：医療・介護のための死生学入門，東京大学出版会，2017，全vii+28頁；清水執筆担当：臨床死生学の射程－「最期まで自分らしく生きる」ために－，p31-74
- 3) 本間照雄，松原久，大井慈郎他：『支え手になったあの日から－地域をみまもる支援員の語り－』，2018，宮城県サポートセンター支援事務所.
- 4) 臨床倫理プロジェクト編，上手に老い、最期まで自分らしく生きるための心積りノート〔改訂版〕，2018，全64頁，岩手保健医療大学 臨床倫理プロジェクト.

【論文】

- 1) 清水哲郎：人生の最終段階における医療の選択に関する意思決定支援，エンド・オブ・ライフ ケア 1-6，2018. p2-10
- 2) 大井慈郎：若手教員・研究者の立場より－東北地方における社会学教育・研究の現状と課題－，社会学年報，2017. p111-114（依頼原稿）

【学会発表】

- 1) 清水哲郎：《皆一緒》と《人それぞれ》－人間における倫理の構造－，岩手哲学会第51回大会公開講演（招待），2017. 7. 15 岩手大学
- 2) 清水哲郎：高齢者と家族の意思決定支援－救急に関するACPと《心積り》－，第43回京都医学

会学術集会 シンポジウム「高齢社会における救急医療」(招待シンポジスト), 2017. 9. 24 京都府医師会館

- 3) 清水哲郎: 包括的な疾患治療とACPの融合—フレイルの進行を視野に入れて—, 第29回日本生命倫理学会大会 公募シンポジウム I 「ACPにフレイルの知見を活かす — よりよい高齢者医療のために」 (査読あり), 2018. 12. 16—17 宮崎シーガイア
- 4) 大井慈郎: インドネシア首都圏の拡大プロセス, 日本都市学会第64回大会, 2017. 10. 28 石巻魚市場 (査読あり)
- 5) 大井慈郎: インドネシア首都圏の拡大と労働者の移動—非正規雇用者に着目して—, 日本社会学会第90回大会, 2017. 11. 4 東京大学 (査読あり)
- 6) 大井慈郎: 郊外工業団地と雇用労働者が形作る東南アジア都市, 東北社会学会研究例会, 2018. 1. 28 東北大学 (招待)

以上

2017 年度 基礎看護学領域活動報告

1. 領域構成

豊嶋三枝子（教授）、竹本由香里（准教授）、作間弘美（助教）、成田真理子（助教）、佐藤恵（助手）

2. 基礎看護学領域における教育に関する内容と評価

開学年度であり、基礎領域は看護学概論をはじめ、専門科目として最初に開講する科目が多く、看護学概論（豊嶋教授）、基礎看護援助論（豊嶋教授、竹本准教授）、看護理論（豊嶋教授）、ヘルスアセスメント論、生活援助技術論、早期体験実習、生活援助技術論は、領域内メンバーが分担・共同して講義・演習、実習を担当した。また通年科目としての基礎ゼミナールは、豊嶋教授、竹本准教授、成田助教が担当した。

基礎看護学で教授する科目は、看護学の基盤としての役割を担うため、学生のレジユネスを把握し、各科目の教授内容について工夫しながら初年次を終えた。早期体験実習および生活援助実習の準備・調整・実施・評価についても、全員が協力して大きな問題なく遂行することができた。早期体験実習は、初年度で他学年もいないため基礎看護学領域教員のみならず、申請内容をふまえ学内全員の教員が担当した。来年度は、学年も増えるため、学内待機教員を要することもあり、担当教員については、配置を見直し、計画する予定である。生活援助実習は、申請どおり今年度に順じて計画する。

以上、開学年次の授業・実習に関しては大きな問題もなく、全員が役割をきちんと遂行し、スムーズに実行できた。

次に、今後1年次の基礎領域科目の開講時期等で改善を要する点を2点あげる。ひとつは、前期演習科目の「ヘルスアセスメント論」である。形態機能学と並行して教授するため順序性の面で問題がある。形態機能学の理解がほとんど進んでない段階では、ヘルスアセスメントにおけるフィジカルアセスメントの理解に時間を要する。今年度は前期後半に「ヘルスアセスメント論」を設定し、少しでも学生の学習効果をあげようと努力した。そのため今後は、開講時期を形態機能学終了後の1年後期に変更する等の改善が必要である。

また、実習時期に関しては、生活援助実習は、冬季で雪の多い時期であり、インフルエンザなどの感染症罹患のリスクが高いこと、悪天候の影響を受けやすいことなどをふまえて今後開講時期の変更について検討が必要である。

3. 基礎看護領域における研究に関する内容と評価

豊嶋教授は、山形県立保健医療大学の菅原京子教授代表、および沼澤さとみ教授代表の科学研究費助成事業における連携研究者としてデータ収集に協力した。佐藤助手は、前職場で手掛けていた研究を学会発表すると共に、修士論文の一部を2つの学会で発表した。佐藤助手は修士論文を英語論文としてまとめている状況であり、今後まとまり次第投稿予定である。また成田助教、佐藤助手が中心となり、領域内メンバーで研究費を出し合い、共同研究に取り組み、その結果を次年度の看護系学会に発表するため抄録を作成し、演題登録を行った。その後論文にまとめ投稿する予定である。その他、メンバーそれぞれ学内

の3つのプロジェクト研究のいずれかに参加し、データ収集等に取り組んでいる。

総括としては、開学年次であり、メンバーは前職が本学準備室から2名移行、臨床から3名移行のため、継続した研究に取り組める環境に属していなかったこと、および基礎領域は他領域に比較して、開学から即授業、実習に関わる比率が高く、教育に時間を多く要することもあり、研究業績は少なく、十分ではなかった。今後は今年度取り組んだ研究を含め、業績を上げるために努力していきたい。

今年度の研究業績は、著書、論文はなく、学会発表のみで下記のとおりである。

【学会発表】

- 1) 佐藤恵, 佐藤眞理, 小山田信子, 佐藤喜根子: 経膈分娩と帝王切開術の双方に適した出産体験に関する自己評価尺度についての文献検討, 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017年12月, 仙台国際センター.
- 2) Megumi Sato, Mari Sato, Nobuko Oyamada, Ayumi Sakata, Kiyomi Kumagai, Emiko Takahashi, Maki Oikawa, Mai Hiwatashi, Yoko Abe, Eriko Saito, Prof. Kineko Sato: Development of the Japanese version of the Salmon's Item List (Rating scale for satisfaction of childbirth experience) for comparing different modes of delivery, The 8th Congress of the International Society for Gender Medicine, 2017年9月, 仙台国際センター.
- 3) 菅原純子, 菊池宏美, 菅原小百合, 昆千宜, 佐藤恵: 地域保健センタースタッフの母乳育児支援の認識と地域連携のための課題, 第26回母乳育児シンポジウム, 平成29年8月, 神戸国際展示場.
- 4) 遠藤芳子, 竹本由香里, 甲斐恭子: 地域に暮らす生涯のある子どもとその家族の災害発生時における連携ニーズ調査, 第20回北日本看護学会学術集会, 2017年8月, 山形大学.
- 5) 菅原京子, 佐藤志保, 井上京子, 後藤順子, 槌谷由美子, 高橋直美, 今野浩之, 遠藤和子, 沼澤さとみ, 安保寛明, 渡邊礼子, 齋藤愛依, 豊嶋三枝子, 前田邦彦, 遠藤恵子: 地元住民の砦となる小規模病院等の看護職のキャリア形成—大学との協働によるブレイクスルー—, 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017年12月, 仙台国際センター.

以上

2017年度 成人看護学領域活動報告

1. 領域構成

石井真紀子（講師）、齋藤史枝（助教）、大崎真（助手）

2. 成人看護学領域における教育に関する内容と評価

2017年度の「基礎ゼミナール」は石井講師と齋藤助教の2名がそれぞれのグループを担当した。PBLの基礎となる文献抄読や文献検索、討議、レポート作成、発表などを通して学生が主体的に学ぶための技術の修得を支援した。これにより学生の探求心が刺激され、ディスカッションやプレゼンテーション能力の向上につながったと考える。また石井が「人間の生涯発達」を担当した。成人期の発達の特徴と関連する理論について概説することで学生にとって成人看護学概論へとつながる内容であった。齋藤は次年度の看護過程論の講義内容を担当教員とともに検討し、記録用紙の作成や紙上事例の検討を行った。石井は「看護倫理」の担当者間で授業内容や紙上事例の検討を実施した。次年度に向けての準備は整ってきていると考える。

臨地実習に関しては石井講師、齋藤助教、大崎助手が「早期体験実習」と「生活援助実習」を担当した。緊張を伴う実習環境でいかに学びを得られたかという姿勢で学生と関わった。次年度開講の「療養援助実習Ⅰ」については実習施設の確保と調整を計画的に進めている。再来年度の「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」についても同様に実習施設の確保と実習内容の検討を行っている。実習についても次年度以降の準備性は段階的に整ってきていると考える。

3. 成人看護学領域における研究に関する内容と評価

2017年度は、齋藤助教が前勤務施設で取り組んだ研究をまとめ、学会で発表した（共著）。

石井講師、齋藤助教がそれぞれ本学のプロジェクト研究を担当し、今後成果を発表する予定である。

総括として、今年度は開学年度ということもあり領域としての研究業績が十分ではなかった。次年度以降はより力を入れて取り組んでいきたい。

以下論文等

【学会発表】

- 1) 小林由貴子、稲村佳子、齋藤史枝、佐原佑佳、鈴木愛史、中川智子、和田沙智子、小野久実子、齋藤律子、片岡ひとみ、鈴木民夫：小児のライン確保時のシーネ固定による褥瘡予防の取り組み 日本褥瘡学会誌 Vol.19 No.3 p345、2017

2017 年度 老年看護学領域活動報告

1. 領域構成

木内千晶（准教授）

2. 老年看護学における教育に関する内容と評価

1. 基礎ゼミ

10 人の 1 年生に対し、文献検索、グループディスカッション、レポート作成、プレゼンテーション等、大学での学習に必要な学習スキルについて、アクティブラーニング型授業を行った。

学生は上記の学習スキルの基本を理解できたと考える。また、自主的に学ぶ姿勢の必要性を理解できたと考える。10 人のグループ学習においては、積極的に役割を果たす学生とそうで無い学生がいた。今後は、グループ・ダイナミクスを引き出す教授方法について、さらに授業デザインを考えていく必要がある。

2. 人間の生涯発達

1 年生後期 15 コマの講義の内 2 コマ分で、老年期の発達理論、発達課題について講義した。老年期の発達における身体的、精神的、社会的特徴について、諸理論を交えて教授した。

今年度は、1 回目が冬休み明け 2 日目、2 回目は実習のため 1 回目から 3 週間の間が空く時間割であったため、成人期からの連続性と、老年期の中での連続性を考慮した講義が必要であった。老年看護学概論の集中講義が 1 回目と 2 回目の間に入ったため、講義内容には重なる部分もあった。今後は、老年看護学概論と同時期の講義のため、学生の学修効果を考慮した授業展開を考えていく必要がある

3. 老年看護学における研究に関する内容と評価

1. 個人・共同研究

個人では、療養病床の看護職のワーク・エンゲイジメントに関する研究に取り組んだ。他大学の教員と共同で、臨床看護師のバーンアウトに関する研究、病棟看護師の組織風土に関する研究に取り組んだ。その成果を以下の通り学会発表した。研究成果の発表が学会発表止まりとなっているため、今後は論文として社会に発表していく必要がある。

2. 学内プロジェクト研究

学内の教員メンバーとタブレット端末を用いた反転授業導入に向けての基礎研究に取り組んだ。タブレットを活用した教育を実践している大学 2 校の視察聞き取り調査を実施したほか、本学学生を対象としたタブレット端末 (iPad) 活用状況および情報活用能力に関する質問紙調査を実施した。

以下論文等

【論文】

- 1) 木内千晶, 療養病床に勤務する看護職の職務関与の構造分析, 日本農村医学会雑誌, 66(1), 9-20, 2017.

【学会発表】

- 1) Yuko TAKAYAMA, Eiko SUZUKI, Atsuko KOBIYAMA, Chiaki KINOUCHI, A Gender-related Comparison of Factors Affecting Burnout Among Japanese Hospital Nurses, International Council of Nurses Congress – Barcelona, 2017.
- 2) 木内千晶, 鈴木英子, 根岸貴子, 高山裕子, 柴田滋子, 療養病床に勤務する看護職のワーク・エンゲイジメントとパフォーマンスの因果プロセス, 日本看護科学学会 第37回日本看護科学学会学術集会, 2017.
- 3) Mika TAKANO, Eiko SUZUKI, Yoshiko SERA, Kyoko TAHARA, Chiaki KINOUCHI, Masahiko MISHIMA, Selection of question items for a scale to measure perceptions of nurses of organizational climate in wards, 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference, 2018.

以上

2017 年度 母性看護学領域報告書

1. 領域構成

江守陽子(教授)、 大谷良子(助教)

2. 母性看護学における教育に関する内容と評価

母性看護学研究領域では、本学開設と同時に江守教授、大谷助教の2名体制でスタートした。2017年度は母性看護学領域に関する科目の開講はなかったが、次年度以降の準備として母性看護学実習室の整備、備品・物品購入、次年度以降開講予定の「母性看護学概論」「母性看護援助論」「母性看護技術論」のシラバス、授業・演習の学習内容について検討を進めた。また、1年次科目の「基礎ゼミナール」「早期体験実習」「生活援助実習」「人間の生涯発達(2コマ)」を担当した。母性看護学領域の直接の教育は担当していないが、1年生の看護専門科目の学習や学生生活を教員として支援した。次年度以降、当領域の本格的な教育の準備を予定している。

3. 母性看護学における研究に関する内容と評価

研究活動としては、江守教授が前任地で行ってきた研究成果を原著としてまとめた。また、今年度から新たに開始した科研費：「育児期にある女性の社会経済的地位と健康関連QOL および育児ストレスとの関係」、学内プロジェクト：「看護学生の地域志向性を高める教育方略の検討ー岩手県内の看護学生と看護職者の職業的アイデンティティと地域志向の実態調査ー」については、学内の研究倫理審査を終え、新たな研究フィールドを確保するとともに、順調にデータ収集、分析を進めている。これまでは、各自の研究テーマについての研究を進めてきたが、母性看護学研究領域としての共同研究については、今後検討・準備する予定である。

以下論文等

【論文】

- 1) 武田三花、小泉仁子、江守陽子
関東地方 2 校の女子学生の生活習慣と隠れ肥満についての探索的研究
日本プライマリ・ケア連合学会誌 40 (1) : 2~8. 2017
- 2) 山口慶子、湧水理恵、江守陽子、窪田満
先天代謝異常児と家族の生活の医療社会面および健康関連 QOL の実態
厚生指針 64 (7) : 33~44. 2017
- 3) Tokoro Kyoko, Ito Yoshiaki, Emori Yoko, Kawaguchi Takayasu
Relationship between Fatigue and Heart Rate Variability in Mothers up to Three Months Postpartum.
MOJ Womens Health 2017, 6(3): 00156. doi: 10.15406/mojwh.2017.06.00156
- 4) 齋藤佑見子、古谷 佳由理、湧水理恵、江守陽子
新生児集中治療室 (NICU) 看護者が抱く子どもの End-of-Life ケアに対する困難感と

その関連要因－「家族とのコミュニケーション」の困難感を軽減する要因の分析－
小児保健研究 77(1) : 27-34. 2018

【学会発表】

- 1) Sachiyo Miyagawa, Atsuko Kawano, Yoko Emori
Relation between sleep disturbances and perinatal outcomes in pregnant women. The 31st ICM Triennial Congress in Toronto, Canada. 2017, June, 18-22, Toronto.
- 2) 戸部浩美、上別府圭子、江守陽子
アンガーマネージメントプログラムを受講した母親の経験：質的研究
日本家族研究・家族療法学会 第34回つくば大会、2017、8.18-20、つくば市
- 3) 堀江久樹、江守陽子
小児がん経験者の余暇活動と学生時代の部活動に関する一考察 ー成人した独身男性を対象とした調査よりー
日本レジャー・レクリエーション学会 第47回学会大会、2017、12.10、那覇市

2017年度 小児看護領域活動報告

1. 領域構成

濱中喜代（教授）、遠藤芳子（教授）、甲斐恭子（助教）

2. 小児看護学領域における教育に関する内容と評価

2017年度は、基礎ゼミをメンバー3人が担当した。1年生の学習状況や到達レベルの確認に役立ったと考える。関連科目として、「人間の生涯発達」の科目を濱中教授が責任者として担当した。小児の発達段階、発達理論、各期の特徴について概説でき、2年次の小児看護学概論に繋げられる内容になった。また、今後の科目の講義及び演習内容を検討した。実習場所の確保に向けて、病院施設との折衝し、具体的な学習内容についても検討した。次年度に向けての準備性がある程度高まったと考える。

3. 小児看護学領域における研究に関する内容と評価

2017年度は、濱中教授が甲南女学院大学、谷川弘治教授代表の科学研究費助成事業における分担研究者として、研究をまとめ、甲斐助教とともに下記のように学会発表した。次年度には論文作成予定である。また本学、清水哲郎教授代表の科研の分担研究者として、看護倫理における文献レビューおよび看護倫理教育に関して情報収集を行った。

遠藤教授は科学研究費助成事業における挑戦的萌芽研究 遠藤芳子教授代表において、研究をまとめ、下記のように学会発表した。そして、この研究に関連した公開講座に協力者として甲斐助教と共に参加した。また、山形大学の佐藤幸子教授の共同研究者として研究論文を学会誌に発表、および研究を学会で発表した。

そのほかに、メンバーが本学の3つのプロジェクト研究それぞれ担当し、データ収集等に取り組んでおり、今後成果発表する予定にある。

総括として初年次としては活動・研究はある程度できたと考える。次年度以降さらに向上的に取り組んでいきたい。

以下論文等

【論文】

- 1) 田桑礼子、遠藤芳子：重症心身障害児の母親が障害を受け止めるまでの過程における看護師の役割 北日本看護学会誌 20（2）2018. p37-47

【学会発表】

- 1) 小林京子、甲斐恭子、濱中喜代、小野鈴奈：小児医療の現場での多職種連携していくために看護師に求められる力 日本小児看護学会第27回学術集会講演集 p123、2017 京都国際会館

- 2) 甲斐恭子、濱中喜代、谷川弘治：特別支援教育担当教員の小児医療現場における協働・連携 日本育療学会第21回学術集会抄録集 p26、2017 ホテルグランヴェール岐山 (岐阜市)
- 3) 甲斐恭子、濱中喜代、小林京子、小野鈴奈、谷川弘治：小児医療の現場における多職種連携の現状と課題－医療従事者・保育士・教師間のフォーカスグループインタビューから 日本小児保健学会学術集会講演集 p241 2017 大阪国際会議場 (大阪市)
- 4) 村井麻子、遠藤芳子：学童期及び思春期の神経発達障害のある子どもを養育する母親の行動 日本小児看護学会第27回学術集会、2017 京都国際会館
- 5) 田桑礼子、遠藤芳子：重症心身障害児の母親が障害を受け止めるまでの過程における看護師の役割 第20回北日本看護学会学術集会、2017 山形大学
- 6) 菅原梨恵、遠藤芳子：先天性疾患を持って生まれた子どもの母親の心配事とそれに対する看護師の援助 第20回北日本看護学会学術集会、2017 山形大学
- 7) 遠藤芳子、竹本由香里、甲斐恭子：地域に暮らす障害のある子どもとその家族の災害発生時における連携ニーズ調査 第20回北日本看護学会学術集会、2017 山形大学
- 8) 佐藤幸子、塩飽仁、遠藤芳子、佐藤志保：心身症・神経症児の学校や仲間関係における対人関係の困難が高まる場面の検討 第37回日本看護科学学会学術集会、2017 仙台国際センター

以上

2017年度 精神看護学領域報告書

1. 領域構成

山本勝則（教授）

2. 精神看護学における教育に関する内容と評価

教育活動としては、通年で「基礎ゼミナール」を担当した。休学した学生や健康上の理由により欠席が増えた学生がいた一方、積極的に取り組んだ学生もおり、多様性が目立った。前期は「早期体験実習」、科目責任者として「対人コミュニケーション」、分担者として「早期体験実習」を担当した。後期は、科目責任者として「メンタルヘルス」、および「人間関係」を担当した。また分担者として「人間の生涯発達」を担当した。

全て基礎科目及び専門基礎科目で、全学生が試験に合格したので、専門科目を学ぶ準備が整ったと考える。今後学生の学力差への対応などの課題は残されたものの、開学初年度の取り組みとしては一定の成果を得たものとする。なお、これらの科目は、精神看護学領域の教育を支える科目でもあり、領域の科目を学ぶ準備も整った。

3. 精神看護学における研究に関する内容と評価

論文投稿、研究費の獲得は行われなかった。学会発表も筆頭の発表は行っていない。共同発表は精神看護領域およびその他の看護領域の研究15件を行った。学会活動としては、日本応用心理学会理事、国際交流委員会委員、日本精神保健看護学会の第27回大会運営における執行委員、およびシンポジウムの座長を担当した。

学会の共同発表数が多いが、論文や研究費獲得がないので研究活動は不活発であったと言わざるを得ない。学会活動への取り組みは、過不足ない。

以下論文等

【学会発表】

- 1) 大島友美、山本勝則（2017年6月）身体合併症を有する統合失調症患者の自己決定における精神科看護師の支援 日本精神保健看護学会第27回大会・総会 プログラム・抄録集 p136 2017.6.25
- 2) 奥山真治郎、山本勝則（2017年6月）精神看護専門看護師が体験する倫理的問題とその対応 日本精神保健看護学会第27回大会・総会 プログラム・抄録集 p141 2017.6.25
- 3) 守山洋、河村奈美子、岩本裕一、佐藤史教、緒方浩志、戸田岳志、中村創、伊東健太郎、山本勝則、星幸江（2017年6月）これからの精神看護学におけるシュミレーション教育の発展と課題（WS） 日本精神保健看護学会第27回大会・総会 プログラム・抄録集

p 96 2017. 6. 25

- 4) 大野夏代、山本勝則、岩見喜久子、杉本夕香里、新関幸子 (2017年8月) 触れるケアはイキイキ働く看護師を育てます 2017(W S) 日本看護学教育学会第27回学術集会 プログラム・講演集、p 106 2017. 8. 17
- 5) 古都昌子、藤井瑞恵、矢野祐美子、坂東奈穂美、山本勝則、樋之津淳子、勝見真澄、樋口晴美、中村恵子 (2017年8月) 看護基礎教育の講義に中堅看護師が参画したことによる学生の教育効果 第1報—看護過程論初回講義の聴講から— 日本看護学教育学会第27回学術集会プログラム・講演集、p 178 2017. 8. 17
- 6) 藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、坂東奈穂美、山本勝則、樋之津淳子、勝見真澄、樋口晴美、中村恵子 (2017年8月) 看護基礎教育の講義に中堅看護師が参画したことによる学生の教育効果 第2報—援助の人間関係論演習場面の見学から— 日本看護学教育学会第27回学術集会プログラム・講演集、p 179 2017. 8. 17
- 7) 守村洋、伊東健太郎、山本勝則 (2017年8月) 精神看護学におけるシュミレーション教育の効果と質の向上—ビデオ視聴を導入した模擬患者教育— 日本看護学教育学会第27回学術集会プログラム・講演集、p 259 2017. 8. 18
- 8) 樋之津淳子、藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、中村恵子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美 (2017年8月) 看護コンソーシアム構築に向けて方策を探る—大学と医療施設のつながりから看護職を支援するために— (インフォメーション・エクステンジ) 第21回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 200 2017. 8. 19
- 9) 矢野祐美子、藤井瑞恵、古都昌子、樋之津淳子、中村恵子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美 (2017年8月) 大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果 第1報—直後のグループディスカッションから— 第21回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 331 2017. 8. 19
- 10) 古都昌子、藤井瑞恵、矢野祐美子、樋之津淳子、中村恵子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美 (2017年8月) 大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果 第2報—研修1か月後の研修参加者によるグループインタビュー結果から— 第21回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 332 2017. 8. 19

- 11) 藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、樋之津淳子、中村恵子、坂東奈穂美、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美 (2017年8月) 大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果 第3報— 看護師へのインタビューから 第21回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 332 2017.8.19
- 12) 山崎陽子、山本勝則 (2017年8月) 精神科身体合併症患者に関する看護師長のマネジメント 第21回日本看護管理学会学術集会抄録集、p 268 2017.8.20
- 13) 大野夏代、山本勝則 (2017年8月) 病者の心身の苦痛を緩和する看護師のマッサージ (自主企画WS) 日本応用心理学会第84回大会発表論文集、p 7 2017.8.26
- 14) 坂東奈穂美、藤井瑞恵、古都昌子、矢野祐美子、樋之津淳子、中村恵子、山本勝則、勝見真澄、樋口晴美 (2017年10月) 大学と医療施設の協働による中堅看護師研修の効果と期待—看護管理者の観点から—、第48回日本看護学会—看護管理—学術集会、(p ?) 2017.10.19
- 15) NatsuyoOno, YukikoNiizeki, KatyunoriYamamoto(2018.1) Promotive and Obstructive Factors of Bedside Masseges by Nurses. Program Book p46, 21st East Asian Forum of Nursing Scholars & 11th International Nursing Conference. January 11, 2018

